

古事記について (3)

スサノオ (タケハヤスサノオ/須佐之男命) と大国主神

追放されたスサノオは、さまよう道中で食べ物を大気津比売神に求めた。オオゲツヒメは、鼻や口、尻から種々のおいしい食べ物をつくってもてなしたが、スサノオは、汚いことをして料理をさし出すと
思っ、オオゲツヒメを殺してしまった。殺されたオオゲツヒメの頭から蚕、目から稲の種、耳から粟、
鼻から小豆、女陰から麦、尻から豆が生まれ、その体はすべて植物となった(48～49頁)。

スサノオは、出雲の国の斐伊川のほとりの鳥髪というところに降りた。その時、箸が流
れてきたのを見て川上に人が住んでいるはずだと思って流れをさかのぼって行くと、老人
と老女が少女を中にして泣いていた。訳を聞くと、老人は娘は以前は八人いたが、高志の
八岐大蛇が毎年やってきて食べてしまった、いま、また八岐大蛇がやってくるきなので
泣いている、と言う。スサノオがさらに尋ねると、オロチは身体一つに八つの頭と八つの
尾があり、長さは谷を八つ、山の尾根を八つ渡るほど大きい、などと言う。老人がスサノ
オの要求通り娘を妻にさし上げると言ったところ、スサノオは策を説いて、オロチに強い
酒を沢山飲ませて酔って動けなくなったところを、腰に佩いていた十束の剣でオロチ
を斬り刻んだ。その尾の一つを切ったときスサノオのたちの刃が欠けたので太刀の先で切
り拓くと都牟刈の太刀(偉大な力をもった太刀)があった。それを天照大神に献上した。そ
れがいまの草薙の太刀である(49～52頁)。

約束通り娘・クシナダヒメを妻にもらった。須佐之男命は、出雲の国に宮を作った。また、スサノオ
は、イザナキとイザナミの産んだ子の一人・オホヤマトミ(山の神)の娘・カムオホイチヒメを妻とした。

スサノオとカムオホイチヒメの六世(又は七世)の孫にオホクニヌシ、またの名をオホナムジ、アシハ
ラノシコヲ、ヤチヒコ、ウツシクニタマという五つもの名を持った大国主神が出た。この大国主神に
は兄弟が沢山いた。その多くの兄弟の神々は、因幡の国の八上比売と結婚したいと思っていた。オホナ
ムジに袋を担がせて従者としていた。その途中、気多の岬を通りかかった時に、皮を剥がれた赤裸の兎
が臥せていた。そこで兄弟の神々は兎に、お前は海水を浴びて強い風に当たって高い山の上で寝て
いるのがよいぞ、と言った。兎がその通りにすると、身体の皮はひび割れして、兎は痛み苦しんで泣き臥
せていた。遅れてやってきたオホナムジが兎に「どうしてお前は泣き臥せているの」と聞いた。兎
は、自分は沖ノ島に住んでいたが、本州に渡りたいと思っていたがすがなかった。それで鮫をだま
して、俺の種族とお前の種族とどちらが多いか比べっこをしよう。お前たちは島から本州迄一列に並べ。
そしたらその上をわたしがお前たちの数を数えながらわたるからそれでどちらが多いかわかると言っ
て鮫の上を跳んでいったが、最後の一匹になった時、嬉しくなつてつい口を滑らせて「お前たちはわたし
に騙されたのだよ」と言ってしまった。そのとたん最も近くにいた鮫がわたしの白い皮を裂き剥いでし
まったのです、と言った。オホナムジは、真水で体をよく洗い、水辺に生えている蒲の穂をとりその穂
を敷き散らしてその上で寝転がるがよいと教えた。その通りにすると兎の体は元の通りに直った。そこ
で、兎は、あの神々はヤガミヒメを得ることはできないでしょう、袋を担いではおられるけれどあなた
様こそヤガミヒメを妻にすることができるでしょう、と言った。

兄弟の神々から妻問いを受けたヤガミヒメは、「わたしはあなた方の言うことは聞きません。私は
大穴牟遲神と結婚したいと思います」と言っ。

それで兄弟の神々は怒り狂って、何度も策をねってオホナムジを殺した。そのたびごとに、オホナム
ジの母親の刺国若比売はオホナムジを蘇生させた。最後に刺国若比売は、オホナムジに「おまえはこん
なことをしているといつかは兄弟の神々に殺されてしまうだろう」と言っ、紀伊国の大屋毗古神のと
ころへ行かせた。兄弟の神々は紀伊国まで追いかけてきて弓に矢を番えながらオオナムジを出せと迫
った。オオヤビコはオオナムジを木の俣から逃げさせて「この世ではあなたの命は危ない」、スサノオの

いる根之堅州国ねのかたすのくにに行きなさい、スサノオが良い謀りはかごとを授けてくれるでしょう」と言った。

それで、オオナムジがスサノオのところに行くときスサノオの娘の須勢理批売すせりびめが出てきて、互いに愛を交わして結婚した（三浦 61 頁、梅原 35・36 頁。武光 87 頁では、「大国主神と須勢理批売は言葉を交わす前から、……『必ず夫婦になりましょう』と、目と目で約束を交わされた」）。

（その後の詳細は、ここでは省略）

オオナムジ＝大国主神が「葦原の中つ国を治めて、この国は賑わって穏やかな暮らしが長く続いた」（三浦 82 頁）。「大国主神は須佐之男命の言葉に従って八十神を従えて、国作りの神とられた」（武光 93 頁）。「大国主神は、……兄弟の神々を追いはらい……初めて国をつくり、支配なされた」（梅原 38 頁）。

「ところが、ある時、高天の原を治めるアマテラスが子神の天之忍穂耳命あまのおしほみみのみことを呼んで、『豊葦原の千秋とよあきの長五百秋の水穂みずほの国は、わが御子みこ・（正勝吾勝勝速日天忍穂耳命まさかつあかつかはやひあめのおしほみみのみこと）マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホミミの統べ治める国でありますぞ』とこう言葉をお寄せになって」……アメノオシホミミを高天の原から中つ国に降ろそうとなされた……」（三浦 82 頁。同旨・武光 114 頁、梅原 50 頁）。

しかし、初めの 2 回のアマテラスの使いは、大国主神に国譲りをさせ得なかった。アマテラスは、三度目にアメノトリフネをタケミカツチに副えて、葦原の中つ国を言向ける（平定する）ために送り出した（三浦 89・90 頁。同旨、武光・124 頁、梅原・55 頁）。

こうして、結局、オオクニヌシは、新たな火きを錐り出して、タケミカツチにおいしい食べ物を作り供えた上で、あらためて次のように誓いの言葉を唱え上げた。「この、わが錐れる火は、高天の原においては、カムムスヒおやの祖神様が、ひときわ高くそびえて日に輝く新しい大殿に、竈つちの煤が長く長く垂れるほどに焚き上げられるがごとく、いつまでもいつまでも変わらず火を焚き続け、地の下はというと、土にえの底の磐根いわねまでも焚き固めるほどに、いつまでもいつまでも変わらず火を焚き続け、その火をもちて贅ひれを作り、強い縄ちひろの、千尋もの長い縄を長く遠く延ばし流して、海人が釣り上げた、口の大きな、尾も鱗うろこもうるわしいスズキを、ザワザワと海の底から引き寄せ上げて、運び来る竹の竿もたわみ撓うほどの大きなスズキを、おいしいお召し上がり物として奉ります」（三浦・54 頁）。

「この誓いの言葉を聞いたタケミカツチは、高天の原に上り帰って……アマテラスともろもろの神たちに、芦原の中つ国を言向け鎮めたことを……申し上げた」（三浦・同頁）

執筆者・北川邦一付言。 2021年5月28日

古事記によると、大国主神の国づくりによって、地上世界・葦原の中つ国は賑わって穏やかな暮らしが長く続いた。それにも関わらず、アマテラスがタケミカツチを使わしてこの国を言向け（平定）したのは、余計なおせっかいと言わねばならない。自らの神話として、このような神話しか持ち得て来なかった大和朝廷は、まことに問題のある朝廷である。日本は、1947年日本国憲法で天皇主権を否定し、国民主権国家になったとはいえ、旧来の天皇制は、徹底的に批判し続けなければならない。